

「律法学者を非難する」

2014年11月03日

マルコによる福音書 12章 38節～40節。イエスは教えの中でこう言われた。「律法学者に気をつけなさい。彼らは、長い衣をまとって歩き回ることや、広場で挨拶されること、会堂では上席、宴会では上座に座ることを望み、また、やもめの家を食い物にし、見せかけの長い祈りをする。このような者たちは、人一倍厳しい裁きを受けることになる。」

律法学者はモーセの十戒を中心にした膨大な律法体系を学び、それを民衆に教える人である。高い学識があったことは確かであろうが、主イエスの時代は民衆の上に君臨する権威ある宗教的指導者グループを形成していた。主イエスは気をつけなさいと言って、彼らを非難している。① 長い衣をまとって歩く。ラビが着用する高価な衣をまとって、悠然と歩いていた。② 広場で挨拶される。民衆から敬意を持って挨拶されることを求めている。③ 会堂では上席、宴会では上座に座る。集会の中心に座り、尊敬されることを求めている。④ やもめの家を食い物にした。やもめは貧しい生活を強いられていたが、彼女たちから金を巻き上げるような理不尽をしていた。⑤ 見せかけの長い祈りをした。信仰深そうな長い祈りをし、宗教家としての権威を見せつけていた。

主イエスの彼らへの非難から、律法学者たちは権威を誇示し、民衆からの尊敬を当然のように求め、社会的弱者を食い物にする横柄な人々であったことがうかがえる。福音書には、主イエスと彼らとの論争が多く記されている。権威、権力を持った者の墮落した姿を見せられる。主イエスの「あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい」という教えとは真逆であった。

マタイ福音書 23章には、1節～36節までを費やして、律法学者とファリサイ派の人々を偽善者と言って、激しく非難する言葉が記されている。その中で、下記の二点に注目される。① 2節～4節「律法学者たちやファリサイ派の人々は、モーセの座に着いている。だから、彼らが言うことは、すべて行い、また守りなさい。しかし、彼らの行いは、見倣ってはならない。言うだけで、実行しないからである。彼らは背負いきれない重荷をまとめ、人の肩に載せるが、自分ではそれを動かすために、指一本貸そうともしない。」律法は守りなさい。しかし、彼らの行いを見倣ってはならない。背負いきれない律法の重荷を民衆に押し付けるだけで、共に担おうとしない。宗教は超越した神を問うことで、それは、人間は皆、地にある相対的な存在であることを認めることである。そして、苦悩を分かち合って、共に生きることを求める。それなのに、自らを高みに置き、他者を蔑み、関係を切ることは神を信じる者の姿ではあり得ない。

② 29節～30節「律法学者たちとファリサイ派の人々、あなたたち偽善者は不幸だ。預言者の墓を建てたり、正しい人の記念碑を飾ったりしているからだ。そして、『もし先祖の時代に生きていても、預言者の血を流す側にはつかなかったであろう』などと言う。」旧約聖書時代の預言者たちは迫害を受け、殺された。今、預言者たちの真実に敬意を払い、墓を建て、記念碑を飾り、自分があの時代に生きていれば、彼らを迫害する者にはならなかったと言う。過去の預言者たちの真実は見える。しかし、主イエスの真実を押し殺そうとし、今が見えていない。過去は見えるが、現実が見えない。自分を立てようとする高慢が目目を閉ざさせていた。主イエスは命をかけて人を愛された。その愛が彼らの偽善を見抜き、公然と非難されたのである。